

研究ノート：

プラトンの「対話集」にみる環境思想

鵜 川 武 久

はじめに

環境思想には、問題点の所在を、政治的・経済的な下部構造に求めるものと、精神的・内面的な要因に求めるものとの二種類があるとされ、それぞれの視点から解決を図ろうとする。前者の代表が社会派エコロジーであり、後者の代表がディープ・エコロジーである。このディープ・エコロジーは、現代の環境問題の淵源をわれわれの精神の内面に求める。われわれの内面性の変革がないかぎり、環境問題の解決はありえないと主張する。ディープ・エコロジーを最初に唱えたのはノルウェーの哲学者アルネ・ネス（Arne Naess）で、1973年に発表された論文「浅いエコロジー運動と深く長期にわたるエコロジー運動・その要約」のなかでのことであつた。⁽¹⁾

アルネ・ネスはインタビューのなかで、ディープ・エコロジーとシャロー・エコロジーの違いを次のように簡潔に答えている。「ディープ・エコロジーの本質は、科学としての生態学（エコロジー）や私がシャロー・エコロジー運動と呼ぶものに比べ、より深く疑問視することにある。〈深い（deep）〉という形容詞で強調される点は、なぜ、いかに、と他人が疑問視しないことを私たちは疑問視するということである。例えば、科学としての生態学は、ある生態系を維持するにはどのような社会が最善かということを問わない。それは価値論や政治や倫理の問題とされるのである。生態学者が自分たちの分野を限定している以上、そんな疑問は出てこない。現在私たちに必要なのは、私の言うエコソフィー（ecosophy）において、エコロジー的な考えを大幅に拡大することである。ソフィー（sophy）は倫理、規範、規則、実践に関連したギリシャ語のソフィア（sophia）〈知恵〉から取ったものである。エコソフィー、つまりディープ・エコロジーにより、科学は知恵へと移行するのである。例えば、経済成長と大量消費が非常に重要であると思うのはなぜか、といった疑問を持つことが必要である。経済が成長しないことがもたらす経済的帰結を指摘するのが、従来解答であった。これに引き替え、ディープ・エコロジーでは、現在の社会が愛や安全や自然への取組といった、人間の基本的ニーズを満たしているかどうかを問題にする。そうすることで、社会の根幹をなす前提を疑うわけである。どんな社会、どんな教育、どんな宗教形態が地球のあらゆる生命に全体として有益なのか、さらに、必要な変化を引き起こすために何をなすべきかを問いかけるのである」。⁽²⁾

ディープ・エコロジーのディープは一般に疑問視しないことを、なぜ、いかに、と疑問視するということである。これと同様な考え方をバートランド・ラッセル (Bertrand Russell : 1872-1970) に見出すことができる。ラッセルはその著書『図説・西洋哲学思想史—西洋の知恵(上)』のなかで次のように指摘している。

「哲学は、誰かが一つの総括的な疑問を発するときが始まる。科学もまた同様である。この種の好奇心をはっきりと示した最初の国民はギリシャ人であった。今日の哲学と科学は、ギリシャ人の発明したものである。堰を切ったようなこの知的活動の生みの親、ギリシャ文明の勃興こそ、史上最も目覚ましい出来事の一つである⁽³⁾」。「総括的疑問を発することが哲学と科学の始まりである、と述べたが、それならば、そのような疑問の形はどのようなだろうか。最も広い意味では、このような疑問は、何気なく見ただけの人には一連の偶然で出鱈目な出来事としか映らぬものに、秩序を求めると同じことと同じである⁽⁴⁾」。

また、バートランド・ラッセルは前掲書のなかで、西洋哲学の源流であるギリシャ哲学を論じた箇所で、次のように述べている。「本書のページに目を通すと、どんな哲学者でも、プラトンないしアリストテレスほど、紙幅を与えられたものがないことがわかるであろう。これがそうなるのは、彼らの地位が、哲学史上、独自なためである。第一に、彼らは、ソクラテス以前の数々の学派の後継者兼体系家として登場し、彼らのところまで伝えられてきたものを発展させ、昔の思想家では完全に貫かれていなかった多くのことを明白にした。次に、彼らは、各時代を通じて、人々の想像力にとっても大きな影響を及ぼしてきた。西洋で思弁的推理が栄えたところでは、どこでも、プラトンとアリストテレスの影法師が背景に見え隠れしていた。最後に、哲学に対する彼らの貢献は、おそらく古今のいかなる思想家よりも、実のあるものである。哲学問題で、彼らが価値のあることを何か言わなかった問題は、ほとんど一つもなく、こんにち、アテナイの哲学を無視しながら、独創的なことをやり出す人は、誰でも、自分を賭けてやらざるをえない⁽⁵⁾」。

ラッセルのこのような言説と Gabriela Roxana Carone の論文 “Plato and Environment” から示唆をうけて、敢えて門外漢であることを顧みず、環境思想の源流の一端を垣間見ることができればと、プラトンの『対話集』の一部を繙いてみることにした。

1. プラトンの目的論的宇宙観

『ティマイオス』29E ティマイオス 生成する事物全てとこの宇宙万有との構築者が、いったいどのような原因によって、これを構築したのかということをお話しましょう。構築者はすぐれた善きものでした。ところが、およそ善きものには、何事についても、どんな場合にも、物惜しみする嫉妬心は少しも起こらないものです。そこで、このような嫉妬心とは無縁でしたから、構築者は、すべてのものができるだけ、構築者自身によく似たものになることを望んだのでした。まさにこれこそ、生成界と宇宙との最も決定的な始めだとすることを、賢者たちから受け入れるなら、それが一番正当な受入方でしょう。30A すなわち、神は、すべてが善きもので

あることを、そして、できるだけ、劣悪なもの一つもないことを望み、こうして、可視的なもののすべてを受け取ったのですが、それはじっとしてはいないで、調子外れに無秩序に動いていましたから、これを、その無秩序な状態から秩序へと導きました。それは、秩序の方が無秩序よりも、あらゆる点で善いと考えたからです。ところで、最も善きものには、最も立派なこと以外に他のことをするのが許されないのは、かつていまでも変わりのないことです。**30B** だから神は、推理の結果、次のようなことを発見しました。——すなわち、本性上可視的であるような事物のうち、どんなものも、それぞれ全体として考えられる場合には、理性なきもののほうが理性あるものよりも、すぐれて立派なものとなることはないだろう。ところがまた、理性は魂を離れては、何ものにも宿ることはできない——ということです。そこでこの推理の故に、神は、理性を魂のうちに、魂を身体のうちに結びつけて、この万有の造作をまとめ上げましたが、それは、本性上最も立派で最も善き作品を完成したことになるように、ということだったのです。さて、このようにして、かのありそうな言論に従えば、こう言わなくてはなりません。**30C** この宇宙は、神の先々への配慮によって、⁽⁶⁾ 真実、魂を備え理性を備えた生きものとして生まれたのである、と。

『ティマイオス』**48A テイマイオス** 何故なら、この宇宙の生成は、「必然」と「理性」との結合から、〔両方の要素の〕混成体として生み出されたからです。このさいにはしかし、「理性」のほうが、「必然」を説き伏せて、生成するものの大部分を最善へ導くようにさせたいということで、「必然」を指導する役割を演じたのでして、このようにして、このような仕方では「必然」が思慮ある説得に伏することによって、最初に、この万有は構成されたわけなのです。ですから、もしも、万有がいま言ったような仕方では生成してきたその模様を、真実ありのままに語りうとするなら、彷徨する種類の原因をも以上の話混ぜて、それが元来どのようにして運動を惹き起こすようになっているかを、⁽⁷⁾ 話さなければなりません。

『法律』**XII 966E アテナイからの客人** その一つは、わたしたちが魂について述べていたことです。つまり、物体の運動変化は、ひとたび生じると、その物体につねに流動してやまぬあり方をあたえるものですが、そういったすべての物体よりも、魂の方がより古いものであり、より神的なものであるということなのです。そしてもう一つは、星の運動や、「万有を秩序づけている」^{ノウス}知性の支配下にあるかぎりのその他の諸天体の運動が、いかに規則正しいものであるかということです。事実、これらの諸天体を未熟な素人の眼をもってではなしに観察した者で、世の衆衆が予想しているのとは逆の結果とならずに、無神論となってしまった者は、人間のうちには誰ひとりいないからです。

967A アテナイからの客人 というのも、そのような対象を天文学やその他これと必然的に結び付いている諸学問によって研究する者たちは、ものごとは可能な限り必然によって生ずるのであって、善の実現をめざす意志の知的な働きによって生ずるのではないことを観たために、⁽⁸⁾ 無神論者になるのだというふうにして世人の多くは考えているからですが。

『法律』**X 897A アテナイからの客人** 魂は、天や地や海にあるものすべてを、自分自身の

もつ運動によって導いているのですね。つまり、それらの運動には、意欲、考察、配慮、計画、正しい判断や間違った判断、悦びや苦しみ、大胆や恐れ、憎しみや愛という名前がつけられているのですが、またこれらと同類のものか、あるいは第一次的な運動であるものすべてによって、魂は万物を導いているわけです。そして、これらの運動は、今度は、物体のもつ第二次的な運動を自分の支配下において、万物を導きながら、増大や減少、分離や結合、およびこれらに伴うところの温かさや冷たさ、重さや軽さ、堅さや軟かさ、白や黒、苦さや甘さなどを生じさせるのです。**897B** つまり、魂は、これらの運動変化をすべて用いるのですが、なおその上に、「知性」の助けをも得るなら……、万物を正しくまた幸福に導くことになるし、他方、無知を仲間にした場合は、万物をそれとは反対の状態にしてしまうわけです。——どうでしょう、以上述べたことは、事実そのとおりでであるとわたしたちは考えることにしましょうか、それとも、事実はそれとはちがっているかもしれないと、なお疑ってみることにしますか。

クレイニ阿斯 いや、その必要は少しもありません。

アテナイからの客人 さて、それでは、どちらの種類魂が、天や地やそれらの運行全体の支配者になっていると言うことにしましょうか。**897C** 思慮に富み、徳に充ちたものの方でしょうか。それとも、それらのどちらも具えていないものの方でしょうか。では、そのことに対しては、よろしければ、次のように答えてみることにしましょう。

クレイニ阿斯 どんなふうに答えるのですか。

アテナイからの客人 いいですか、あなた、もし天と天のなかに存在するすべてのものの軌道や運行全体が、「知性」の運動や回転や計算と同様な性質のものであって、それと類似した仕方で行われているのであれば、その場合には明らかに、最善の魂が宇宙全体を配慮していて、そしていま言われたような〔知性が運動するのと同様な〕軌道にそって、宇宙全体を導いているのだと言わなければなりません。

クレイニ阿斯 そのとおりで。

897D アテナイからの客人 これに反して、もしそれらのものの運行が気違いじみた無秩序な仕方で行われるとすれば、悪しき魂が導いていると言わなければなりません。

『法律』XII 966C **アテナイからの客人** さて、神々についてのわたしたちの理論、——それはわたしたちが真剣になって仕上げたものですが——、その理論が最も美しいものの一つでないはずはありませんね。つまり、神々が存在することや、神々はどれほどの大きな力を明らかに持っておられるかということ、それを人間の身で知ることが可能な限りにおいて知っているということは、美しいことでしょう。だから、よし国内の大多数の者たちに対しては、彼らが単に法律の条文に従っているだけであっても、大目に見るけれども、国守の職に就くはずの者たちに対しては、もし彼らのうちに、神々についての可能な限りのすべての証明を把握することに努力しない者がいるとすれば、そのような者には、国守の職に就くことを許してもならないということになるわけです。**966D** ところで、この「許してはならない」ということの意味は、神的な素質の持ち主でない人や、神に関する事柄に努力したことのない者は、護法官

の一員にけっして選ばれてはならぬということであり、さらにまた徳の点で選抜される人たちのなかにも加えられてはならぬということなのです。

クレイニ阿斯 おっしゃるとおり、そのような事柄に関して怠惰であったり無能であったりする者は、そのような高貴な地位から遠く離されるのが、たしかに正しいことです。

アテナイからの客人 それなら、お分かりでしょうね。わたしたちが以前に述べたことの中には、神々を信ずることへと導くものが二つあるのですが、⁽¹⁰⁾〈前出：966E, 967Aを参照〉

『法律』X 904A **アテナイからの客人** わたしたちを支配している王（神）は、わたしたちのすべての行為が魂の働きによるものであって、そしてそのなかには多くの徳も、同様に多くの悪徳もふくまれていること、また、魂と肉体〔の結合したもの〕は、ひとたび生じたなら、法律によって認められている場合のように、永遠のものではないにしても、904B 消滅しないものであること、——というのも、その両者のうちの一方が減びたなら、生きものが生まれるということとはけっしてありえないからですが——、そういったことをよく見抜いておられるし、さらにまた、すべて善き魂はほんらいつねに有益な働きをするが、悪しき魂は有害な働きをするということをも考えに入れておられるのです。そこで、そういったことをすべて考え合わせた上で、個々の魂をどこに配置すれば、この宇宙において、徳の勝利と悪徳の敗北とが最も完全に、最も容易に、また最も立派に実現されることになるかを工夫されたのです。かくて、わたしたちの支配者である王は、この計画全体を目標にして、絶えず何かになりつつある魂が、どのような性質のものになった場合に、どのような位置、どのような場所を占めて、そこに住むべきであるかを工夫されているわけです。904C しかし、それがどのような性質のものになるかは、わたしたち一人一人の意志にその責任があるとされたのです。というのも、一般的に言って、わたしたちの欲望がどこに向かい、したがって、魂の状態がどのようなものになるかによって、ほとんどいつの場合でも、わたしたちの誰もが、それに応じた性格の者になるからなのです。

クレイニ阿斯 それはたしかに、そうなるようです。

アテナイからの客人 さて、そういうわけで、魂をもつかぎりのものはすべて、自分自身の中に変化の原因をもっているのだから、変化するし、そして変化すれば、〔至高の神によってあたえられた〕運命の定めと掟に従って動いて行くわけです。つまり、性格の変化がより小さくてより僅かなものである場合は、大地の表面に沿って移動するだけであるが、904D その変化がより大きくて、より不正なものとなった場合は、いわゆる地下の世界へと深く落ちていくのです。そこで、「ハデス」（冥界）とかその他これに類する名前と呼ばれているところであり、人々は生きている間も肉体を離れてからも、夢にまで見たりして大変恐れているところなのです。

そして魂が、自分自身の意志によってか、他の者との交わりの強い影響によって、悪徳でも徳でも、さらにいっそう多い程度にこれを得た場合には、つまり、もしそれが神的な徳との交わりによって、際立って神的な性質のものになったのであれば、その場合は確実に、904E どこか別のもっとよい場所に運ばれて、まったく神聖な特別の場所に移ることになるし、他方、そ

れとは反対の性質のものになった場合には、反対の場所に移って、そこで自分の生活を営むこととなります。

「少年よ、いや、若者よ、君は神々によって配慮してもらっていないように思っているけれども、これこそが、オリュンポスに住みたまう神々の下された裁きなのだ」つまり、人はより悪い人間になれば、より悪い魂の所へ行くし、より善い人間になれば、より善い魂たちのところへ行って、この世に生きている間も、死んでいる間のどの時期においても、似たものが似たものに対して為すのが相応しいことを、相手からされたり、相手になしたりすることになるのだ。神々のこの裁きは、君にしても、他の誰にしても、一度悲運な者になってしまったが最後、これを逃げおおせたと自慢できる者はいないであろう。⁽¹¹⁾

『法律』X 903B アテナイからの客人 「万物は、その全体が保全されてよき状態にあるようにと、宇宙全体を配慮している者によって秩序づけられており、そしてそれらの部分もまた、可能な限り、それぞれがそのものにふさわしい能動や受動の働きをしているのである。しかも、これらの部分のそれぞれには、極めて小さなことに関しても、その能動や受動の働きをつねに監督支配する者たちが定められていて、その末端に至るまでこれを完全なものに仕上げているのである。903C さて、強情な若者よ、君という存在もまた、そういった部分の一つであり、きわめて微々たるものではあるにせよ、つねに宇宙全体へ目を向けながら、それに寄与しようとしているものなのだ。ところが君には、まさにそのことが、つまり、すべての生成は、宇宙全体の生に幸福がもたらされるようにという、そういう目的のために行われているのだということが、分かっていないのである。君のために生成が行われているのではなくて、宇宙全体のために君はつくられているのだ、ということがね。その証拠に、例えば、医者や技術の心得のある職人の場合を考えてみたまえ。彼らはだれも、ある全体的な目標のために何事をも行っているのであって、つまり全体としての最善を目指して努力しながら、部分を全体のためにつくっているのであって、903D 全体を部分のためにつくっているのではないからである。

ところが君は、そのことに不満を抱いている。しかしそれは、君に次のことがよく分かっていないからなのだ。つまり、君の場合にも、宇宙全体にとって最善となるようなあり方をするのが、君と宇宙とは生まれを共通にするものであるがゆえに、君自身のためにも最善となるのだ、ということがね。

ところで魂は、……かの将棋指し〔にもなぞえられる宇宙の主宰者〕にとっては、次のこと以外には何の仕事も残っていないわけである。つまり、より善き性格のものとなっている魂をよりよい場所に、より悪きものとなっている魂をより悪い場所に、それぞれにふさわしい仕方に移しながら、かくして、それぞれの魂が自分にふさわしい運命を引き当てるようにする、⁽¹²⁾ということである」。

○宇宙は、神の先々への配慮によって、魂と理性をそなえた生きものとして生まれた。宇宙万有の構築者は、それらが自身によく似た、すなわち善を志向するものであることを望んだ。

それ故に、無秩序を秩序へと導くことになった。

また、宇宙は必然と理性の混成体として生み出され、理性が必然を説き伏せて、生成するものの大部分を最善へと導くようにした。

物体はつねに流動してやまぬが、それよりも魂の方がより古く、より神的である。星その他の天体の運動が規則正しいのは、「万有を秩序づけている」知性の支配下にあるからである。

魂は、天・地・海にあるすべてのものを自分自身の運動によって導いている。それらの運動とは、意欲、考察、配慮、計画などをさす。なお、魂は万物を導きながら、増大や減少、分離や結合、これらに伴う温かさや冷たさ、重さや軽さ、堅さや軟らかさ、白や黒、苦さや甘さなどを生じさせる。天と天の中に存在するすべてのものの運行が、知性の運動や回転や計算と類似した仕方で行われているのであれば、最善の魂が宇宙全体を導いているといわなければならない。G.R.キャロンの言葉を借りれば、「秩序と数学的均整の視点から善が理解され、数学的均整は構成要素に統一性をもたらす⁽¹³⁾」。

神は、人間のすべての行為が魂の働きによるものであり、その中には多くの徳も悪徳も含まれており、善き魂はつねに有益な働きをするが、悪しき魂は有害な働きをすることを考えに入れてある。それらを勘案したうえ、個々の魂をどこに配置すれば、この宇宙において、徳の勝利が実現するかを工夫している。こうして、わたしたちの支配者である王はこの計画全体を目標にして、絶えず、魂を何処に配置するべきかを工夫している。それがどのような性質のものになるかは、わたしたち一人一人の意思にその責任があるとした。人間は、人間として、自らの責任をとらされることになるのである。そして、目的論的な志向性を自分たちに付与することが自分たちの責務であり、その結果、全体の善のために寄与することになる。全体にとって善であることは、何でも、我々の共通の起源からみて、われわれにとっても最善であることを学ぶべきである。

しかしながら、たとえわれわれが善悪の行状に対して責任を負うとしても、その行状の結果は、宇宙神によって規制されている宇宙正義の目的論的な体系にしたがって確定されてくる。いうまでもなく、この宇宙正義の体系は、上でみたように、より邪悪な行動に走ればより邪悪な魂へと墮落し、より善き道を進めばより善良な魂になる。したがって、生存中にも死後にも、行為に相応しい報いを受ける因果応報のさだめがあるとされる⁽¹⁴⁾。

2. 個体と宇宙の相互作用

『ピレボス』29B ソクラテス それはいまいった物質のどれもが、われわれのところには小部分、しかも微弱にしか含まれていないで、まるで少しも明白なところがなく、その自然の性質に相当するだけの力も持っていないという点なのだがね。一つの例でその点を注意したら、すべてについても同じだとわかってほしいのだ。例えば火だけれども、これはわれわれのところにもあるし、また万有（宇宙）のうちにもある。

プロタルコス それにちがいません。

29C ソクラテス ところが、われわれのところにある火は、ごく少量で力も弱く、大したものではないけれども、宇宙全体のうちにあるのは、その量においても美しさにおいても、またおよそ火と共にある力のすべてにわたっても、まことに驚くべきものがあるのだ。

プロタルコス あなたのいわれることは、まことに本当です。

ソクラテス では、どうかね。宇宙全体の火というものは、われわれの所有する火から生じ、それで養われ、かつまたそれによって支配されているのかね。それとも反対に、かの宇宙全体の火によって、ぼくの火もきみの火も、またその他の動物の火も、以上すべてのことを営んでいるのだろうか。

プロタルコス このあなたの質問は、答えるまでもないものです。

29D ソクラテス いや、それで結構、というのは、動物のうちに含まれているここ(われわれ)の土と、宇宙全体のうちにある土についても、きみは同じ答をしてくれるだろうと思うし、またその他の、少し前にぼくが質問のなかにあげた物質のすべてについても、ね、きみはそういう答をしてくれるだろう。

プロタルコス それとちがった答をしたら、誰も正気とは見られないでしょう。

ソクラテス そう、ほとんど誰一人としてそうは見られないだろう。しかしこれから後の問がまだつづくのだが、ついて来てくれたまえ。すなわち今しがた言われた物質のすべてが一つにまとめられてある場合、われわれはこれを見て物体(もしくは身体)と名付けたのである、ね。

プロタルコス ちがいません。

29E ソクラテス それでは、われわれがコスモス(秩序体)と呼んでいるこの宇宙についても、同じ点を注意してくれたまえ。というのは、それがわれわれのと同じ物質から合成されて一つになっている限り、いまの場合と同じ意味において、それは物体(もしくは身体)だということになるだろうと思う。

プロタルコス あなたの言われることは全く正しい。

ソクラテス それでは、どちらだね、この宇宙の身体から全体にわたってわれわれの身体が養われるのか、それともわれわれの身体から宇宙のそれが養われるのか、さらにまたそれらについて今しがたわれわれが言ったことがらについても、どちらがどちらから受け取って、今ももっているのかね。

プロタルコス これもまた、ソクラテス、わざわざ質問されるまでもないことです。

30A ソクラテス では、どうかね。次のそれ(質問する)だけのことがあるかね。それとも、きみはどう言うだろうね。

プロタルコス どんなのか、すぐ言って下さい。

ソクラテス われわれの身体は魂(生氣・意識)をもつべきと言うべきではないか。

プロタルコス むろん、そう言わなければなりません。

ソクラテス どこから、おお愛するプロタルコスよ、それを取って来てもっているのかね。もしも宇宙全体の身体が、われわれの身体と同じ構成物質を、しかもあらゆる点でよりすぐれたものをもってはいても、ちょうどまさに魂をもつもの（生きもの）でなかったとしたら。

プロタルコス むろん、ほかのどこからも取ってくることはありませんよ、ソクラテス。

ソクラテス そうとも、プロタルコス、ほかにありようはないとわれわれは考えるのだからね。あの四つのもの、すなわち限度と無限と、その両方にわたるものと、それから原因の類だけがね——〔このうち〕後者は、**30B** 万物に内在するものとして四番目にあげられたが、われわれのところにあるもの（身体）には魂をもたせ、身体の鍛錬と、身体に故障が出た場合の医療法をそこにつくり、また他のもののうちにはまた他のものを組合わせるなどして、それは全き知恵、まんべんなき知恵と評判され、呼ばれているというのに、〔他方〕これと同じ構成物質が天の全体においても、またその部分部分の大なるものにも含まれていて、しかもそれが美しく純粋なすがたをあらわにしているというのにだね、これらのうち最も美しく、最も貴重なものの種族を内在させる工夫を、何ということであろう、まったくしなかったなどとは、われわれは考えないからだ。

30C プロタルコス とにかく、そんなことはまったく理屈に合わないことです。

ソクラテス したがって、もしそんなことはありえないのだとすれば、かの説に従って、次のように言う方がよいことになるだろう。すなわちすでに何度も名をあげたが、無限のこの宇宙全体のなかにたくさんあり、また限度も充分にある、そしてこれらの上にはけっして非力ではない原因があって、宇宙的な秩序をつくり、年や季節や月などのきまりを定めているのであって、これは知恵とか知性とか言われてしかるべきものであろう。

プロタルコス ええ、それこそまさにしかるべきことです。

ソクラテス しかし知恵も知性も魂なしには生じ得ないだろう。⁽¹⁵⁾

『ティマイオス』**47B テイマイオス** そこで、わたしに言わせてもらうなら、視覚こそまさに、われわれに最大の裨益をなす原因となっているものなのです。というのは、何しろ、万有を話題にしているいまの話にしてみても、仮にわれわれが星も太陽も天も見ることがなかったとしたら、一つも話されはしなかったでしょうからね。しかし実際には、昼と夜が見られ、月や年の循環だとか、春分・秋分、夏至・冬至が見られたからこそ、それによって数が案じ出され、また時間の観念と、万有の本性についての探究がわれれに与えられたのです。そしてこれらのものから、われわれはすべて哲学と名のつくものを手に入れたのですが、これよりも大きい善いものが、死すべき種族に対して神々から贈られて来ることは、かつてもなかったことですし、また未来においてもけっしてないことでしょう。そこでわたしの言いたいことは、これが眼のもたらす最大の善いものなことなのです。その他のもっと小さな利点は、知を愛し求めることを知らない（哲学者ならざる者）なら、盲目になったときに「それがために悲しみ、徒に嘆く」のでしようが、そんな些細なものを、どうしてわれわれが喋ることができるのでしょうか。いやむしろ、われわれとしては、このこと〔われわれに視覚が備わっていること〕

の原因は、次のようなことを目的とした、次のようなものなのだとすることにしましょう。——すなわち、その原因は、神がわれわれのために視覚を考案してこれを贈り給うたということである。そしてその目的は、われわれが、天にある理性の循環運動を観察して、**47C** この乱れなき天の循環運動を、それとは同族であるが、乱れた状態にある、われわれの思考の回転運動のために役立つようにということであり、そして、天の循環運動を十分に学んで、自然本来に即した正しい推理計算の仕方をわれわれが身につけ、こうして、どのようにしても彷徨することのない神の循環運動を模倣することによって、われわれのうちの彷徨した状態にある回転運動を、正常なものに立て直すようにということである——と。⁽¹⁶⁾

『ティマイオス』**89E** ティマイオス ……無為に過ごし、自分自身の動きを停止しているものは、どうしても、甚だ弱いものにならないわけにはいかないけれども、これに対して、鍛錬されるものは、大いに強くなるのが必然である——と。**90A** ですから、それらのものが互いに釣り合いのとれた動きを持つように、用心していなければならないわけです。

ところで、われわれのもとにある魂で、至上権を握っている種類のもの（理性）については、こう考えなければなりません。——すなわち、神が、これを神霊（ダイモン）として、各人に与えたのである——と。そして、そのものはまさに、われわれの身体の天辺に居住し、われわれが、地上の、ではなく、天上の植物であるかのごとく、われわれを天の縁者に向かって、大地から持ち上げているものなのだと、わたしたちは敢えて主張したいのですが、この主張は、至極正当なものだということになります。何故なら、[われわれの]神的なる部分は、**90B** 魂が最初にそこから生まれたそのところ〔天〕に、われわれの頭でもあり根でもあるものを吊して、身体全体を直立させているわけなのですからね。そこで、欲情や野心の満足にのみ汲々として、そのようなことのためにのみ労すること甚だしい人にとって、その思いのすべてが、死すべき（地上的な）ものになってしまうこと、そしてまた〔その人自身も〕、およそ可能な限り、まったくの、死すべきものになり、その点で少しの不足も残さないことは、——これは、どうにも避けられないことなのです。しかし、これに反して、学への愛と、真の知に真剣に励んできた人、自分のうちの**90C** 何ものにもまして、これらのものを鍛錬して来た人が、もしも真実なるものに触れるなら、その思考の対象が、不死なるもの、神的なるものになるということは、おそらくまったくの必然事なのでしょう。さらにまた、こうした人が〔かれ自身も〕、およそ人間の分際に許される限りの、最大限の不死性にあずかることになり、ものの世話を欠かさず、自ら、自分の同居者なる神霊を、よく整えられた状態で宿しているのだから、かれが特別に幸福（エウダイモン、よき神霊（ダイモン）を持てるもの）であるということも、おそらくは必然でしょう。

ところで、「世話」というものは、誰にとっても、何の世話でも、その方法はただ一つ、各々に対して、それに固有の養分と動きを与えてやることです。ところが、われわれの中の神的なるものと同種の動きと言えば、**90D** それは、万有のなす思考と、その回転運動がそれです。そこで、各人は、これらの運動の跡を追いながら、生まれた時にすっかり損なわれてしまった、

われわれの頭の中の循環運動を、万有の調和と回転運動に学んで矯正し、こうして、観察する側のものを、観察される側のものに似せて、前者を、その最初の本然の姿にかえさなければなりませんし、また、このようにして似せることによって、神々から人間に、現在に対しても未来に対しても課せられた、最もよき生をまっとうしなければならないのです⁽¹⁷⁾。

『法律』X 903B アテナイからの客人 「万物は、その全体が保全されてよき状態にあるようにと、宇宙全体を配慮している者によって秩序づけられており、そしてそれらの部分もまた、可能な限り、それぞれがそのものにふさわしい能動や受動の働きをしているのである。しかも、これらの部分のそれぞれには、きわめて小さなことに関しても、その能動や受動の働きをつねに監督支配する者たちが定められていて、その末端にいたるまでこれを完全なものに仕上げているのである⁽¹⁸⁾」。

903C アテナイからの客人 さて、強情な若者よ、君という存在もまた、そういった部分の一つであり、きわめて微々たるものではあるにせよ、つねに宇宙全体に眼を向けながら、それに寄与しようとしているものなのだ。ところが君には、まさにそのことが、つまり、すべての生成は宇宙全体の生に幸福がもたらされるようにという、そういう目的のために行われているのだということが、分かっていないのである。君のために生成が行われているのではなく、宇宙全体のために君はつくられているのだ、ということがね⁽¹⁹⁾。〈前出：904B, C, D を参照⁽²⁰⁾〉

○宇宙全体のものが、われわれの所有するものから生じ、養われ、支配されているのではない。その逆である。しかも、コスモス（秩序体）とよばれている宇宙の場合も同様である。

視覚によって、昼夜の識別、月や年の循環の認識、そこから数が案じ出され、時間観念と万有の本性の探究ができるようになった。そして、哲学を手に入れることにもなった。これは神から贈られた最大の善である。神が視覚を贈り給うた目的は、天にある理性の循環運動、この乱れなき天の循環運動をわれわれの思考回転運動の乱れを正常化するためである。これこそが、人間を本然の姿に戻すことであり、現在から将来にかけての、神から人間に課せられた最善の生を全うするための課題である。

万物は、宇宙心によって、保全され、良い状態にあるように秩序づけられている。そして、それらの部分もまた、相応しい能動や受動の働きをする。人間もその部分の一つ、宇宙全体に眼を向けながら、それに寄与すべき存在なのである。すべての生成が宇宙全体の生に幸福がもたらされるようにという目的のためにおこなわれている。人間一人のために生成されているのではなくて、各人は宇宙全体のためにつくられているのである。

以上から、個体と宇宙が相互に作用しあい、宇宙は、われわれが意図して従うべき宇宙秩序の要因、ならびに人間行状の宇宙的背景を確立しており、人間は宇宙心によって天文界に示現されている働きを模倣することによって、正しく思考することを学ぶべきことを知らされる。人間の福祉は、間違いなく、秩序ある宇宙に依存している。他方、人間の行為もまた宇宙、わけても「地球」に強い影響を及ぼす。「地球」が宇宙の一部である限り、人間社会の

無秩序は宇宙の混乱に他ならないからである。⁽²¹⁾

3. 宇宙における善と悪の戦いの主人公：人間。

『法律』X 905E **アテナイからの客人** さあそれでは、ほかならぬ神々に誓って尋ねますが、もし神々がほんとうに買収されうる者だとしたなら、一体、どんな仕方を買収されるのでしょうか。そしてそれは、神々がどのような本性の者であり、またどのような性質の者だからでしょうか。神々は、宇宙全体を実際に整えようとしておられる者である以上、当然、支配者でなければならないでしょうね。

クレイニ阿斯 そのとおりです。

アテナイからの客人 だが、そうすると、支配者たちのなかのどんな者たちに、神々は似ているのでしょうか。あるいは、どんな支配者たちが神々に似ているのでしょうか。つまり、小さなものを大きなものにたとえるとすると、わたしたちが神々にたとえることのできる支配者とは、どんな支配者でしょうか。競走中の馬車を駆っている御者たちが、それにあたるのでしょうか。それとも、船の船長がそうなのでしょうか。あるいはまた、軍隊の指揮官たちに神々は比べられるのかもしれませんが。さらには、病気との戦いにおいて身体を守ろうとしている医者たちとか、作物の生育に不都合な季節がいつものごとく訪れるのを恐れながら待っている農夫たちとか、羊の群の監視人たちとかに、神々は似ているとすることもできるでしょうね。

906A というのも、わたしたち自身の間ではすでに、この宇宙には数多くの善いものがある反面、その反対の悪いものもあり、しかも後者の方が数の上では多いと言うことが同意されていたのですから、悪いものに対するそのような戦いは、わたしたちに言わせるなら、終わることのないものであり、並々ならぬ守護を必要とするものだからです。しかしわたしたちには、神々やダイモンたちが味方となって下さっているし、またわたしたち自身が、神々やダイモンたちの所有物（家畜）でもあるわけです。そして、わたしたちを滅ぼすものは、不正や、**906B** 無思慮と結びついた暴慢であり、わたしたちを安全に保ってくれるものは、正義や、思慮を伴った節度なのです。これらの徳は、神々の生ける力のなかに宿っているものですが、そういった徳の一端は、この地上のわたしたちのなかにも宿っているのが、はっきりと見られるでしょう。

ところが、この地上に住んでいる魂たちのうちには、不正な利得をえているところの、明らかに野獣のような者がいるのですが、それらの魂は、番犬であろうと、羊飼であろうと、あるいは文字通りに最高の主人であろうと、見張り監視している者たちの魂の前にひれ伏して、へつらいの言葉や祈願をこめた呪文により、**906C** これを説得しようとしているのです。つまり、悪人どもの言葉にあるように、見張りの者たち（神々）自身は、この世で不当な利得をむさぼっても、何ひとつきびしい罰を受けないですますことができるのだと、説得しようとしているわけなのです。しかし、わたしたちに言わせるなら、いま名前をあげたその過ち、つまり「不当な利得をむさぼること」（自分の分け前をより多くをもつこと、過度）こそ、身体のなか

に現れるなら「病氣」と呼ばれ、季節や年月のなかに現れるなら「疫病」と呼ばれるものであり、また国家や国制のなかに現れるなら、その同じものが、言い方が変えられて、「不正」と呼ばれているのです。⁽²²⁾

900E アテナイからの客人 では、どうでしょう。勇気は徳に属し、臆病は悪徳に属するのだということは。

クレイニ阿斯 それも、そのとおりです。

アテナイからの客人 そして、これらのうちの一方は醜いものであるが、他方は立派なものであると言うのでしょうか。

クレイニ阿斯 かならず、そう言うでしょう。

アテナイからの客人 また、そういった性質の中で、およそ下劣なものはすべて、もしそれが誰かに相応しいとすれば、わたしたち人間こそふさわしく、神々は、大小に関わらず、そのような性質には縁がないということになるのでしょうか。

クレイニ阿斯 そのこともまた、誰もがその通りだと認めるでしょう。

アテナイからの客人 それなら、どうでしょう。無関心や怠惰や無精を、わたしたちは魂の徳のなかに入れるのでしょうか。それとも、あなたはどう言われますか。

クレイニ阿斯 どうしてそんなことができますよう。

アテナイからの客人 むしろ、それとは反対のもの（悪徳）のなかに入れるのですね。

クレイニ阿斯 そうです。⁽²³⁾

903B アテナイからの客人 でもそれは、その者の言い分が間違っていることを、議論によって無理強いに認めさせているだけのことなのです。しかし、〔ほんとうに納得してもらうためには〕その上なお、何か呪文の働きをする物語が必要だと思われるのです。

クレイニ阿斯 それはいったい、どのような物語でしょうか。

アテナイからの客人 では、こんなふうに語って、その若者を納得させることにしましょう。「万物は、その全体が保全されてよき状態にあるようにと、宇宙全体を配慮している者によって秩序づけられており、そしてそれらの部分もまた、可能な限り、それぞれがそのものにふさわしい能動や受動の働きをしているのである。しかも、これらの部分のそれぞれには、きわめて小さなことに関しても、その能動や受動の働きをつねに監督支配する者たちが定められていて、その末端にいたるまでこれを完全なものに仕上げているのである。」〈以下の**903C**、**903D**は既出、再掲。〉

903C さて、強情な若者よ、君という存在もまた、そういった部分の一つであり、きわめて微々たるものではあるにせよ、つねに宇宙全体へ目を向けながら、それに寄与しようとしているものなのだ。ところが君には、まさにそのことが、つまり、すべての生成は、宇宙全体の生に幸福がもたらされるようにという、そういう目的のために行われているのだということが、分かっていないのである。君のために生成が行われているのではなくて、宇宙全体のために君はつくられているのだ、ということがね。その証拠に、例えば、医者や技術の心得のある職人の場

合を考えてみたまえ。彼らはだれも、ある全体的な目標のために何事をも行っているのであって、つまり全体としての最善を目指して努力しながら、部分を全体のためにつくっているのであって、903D 全体を部分のためにつくっているのではないからである。

ところが君は、そのことに不満を抱いている。しかしそれは、君に次のことがよく分かっていないからなのだ。つまり、君の場合にも、宇宙全体にとって最善となるようなあり方をするのが、君と宇宙とは生まれを共通にするものであるがゆえに、君自身のためにも最善となるのだ、ということがね。

ところで魂は、……かの将棋指し〔にもなぞえられる宇宙の主宰者〕にとっては、次のこと以外には何の仕事も残っていないわけである。つまり、より善き性格のものとなっている魂をよりよい場所に、より悪きものとなっている魂をより悪い場所に、それぞれにふさわしい仕方で移しながら、かくして、それぞれの魂が自分にふさわしい運命を引き当てるようにする、⁽²⁴⁾「ということである」。

○われわれは『法律』にあらわれる人間が宇宙全体の中で起こっている善と悪との果てしのない戦いの主人公であることがわかる。宇宙スケールで、善のために働く神々の側にたって戦う責任を力説強調していることがわかる。この戦いにおいて、神々にだけ責任を押し付けるわけにはいかない。その神々はわれわれの協力者にすぎないからである。

なお、「不当な利益をむさぼること」を不正な魂の悪徳とみなしている。人間が損害を被ることなく「不当な利益をむさぼること」ができるという考えをなくすためであろう。

そこで、アテネからの客人はこう付け加える。「〈不当な利益をむさぼること〉こそ、身体のなかに現れるなら〈病気〉と呼ばれ、季節や年月のなかに現れるなら〈疫病〉と呼ばれるものであり、また国家や国制のなかに現れるなら、その同じものが、言いかたが変えられて、〈不正〉と呼ばれている。」この行とさきの「およそ下劣なものはすべて、……わたしたち人間こそふさわしく」の陳述とを組み合わせれば、自然の無秩序のようにみえるものも、われわれ人間に責任があるようにおもわれる。要するに、人間はその個人的ならびに政治的な行状がもつ宇宙的な意味合いに対して大きな責任を負うものであるといえよう。その意味で、キャローンは「われわれ自身が正義を保全すべき義務は、宇宙を可能な最善の状態に保全する義務と密接不可分に連結されていることになる。」⁽²⁵⁾と述べている。

そうだとすれば、プラトンの晩年の思想には、人間と宇宙との間に、強い共生関係がうかがわれるのである。宇宙は生命に満ちている。そして人間の理想は、その個人生活と政治生活において、宇宙の知性と同一性格をもつ、その知性を宇宙の秩序ある目的論的構造を模倣し、持続させるために利用することにある。

(注)

(1) 森岡正博「解説 ディープ・エコロジーと自然観の変革」、小原秀雄 監修『環境思想の系譜 3

- 環境思想の多様な展開』, 東海大学出版会, 1995年, 106~108頁。
- (2) アルネ・ネス, 鈴木美幸訳「手段は質素に, 目標は豊かに」, 小原秀雄『同上書』, 118~119頁。
Arne Naess, “Simple in Means, Rich in Ends”, in *Environmental Philosophy*, Prentice-Hall, 1982, pp.182-192.
 - (3) バートランド・ラッセル著, 東宮 隆・訳『図説・西洋哲学思想史—西洋の知恵 (上)』, 社会思想社, 1981年, 12頁。Bertrand Russell, *WISDOM OF THE WEST*, Rathbone Books, London, 1959.
 - (4) 『同上書』, 21頁。
 - (5) 『同上書』, 96~97頁。
 - (6) 種山恭子訳『ティマイオス』, 田中美知太郎・藤沢令夫編集『プラトン全集 12』, 岩波書店, 1987年, 31~32頁。
 - (7) 『同上書』72頁。
 - (8) 森進一・池田美恵・加来彰俊訳『法律』, 田中美知太郎・藤沢令夫編集『プラトン全集 13』, 778頁。
 - (9) 『同上書』, 616~618頁。
 - (10) 『同上書』, 776~778頁。
 - (11) 『同上書』, 637~638頁。
 - (12) 『同上書』, 635~636頁。
 - (13) Gabriela Roxana Carone, ‘Plato and Environment’, *Environmental Ethics (An Interdisciplinary Journal Dedicated To The Philosophical Aspects Of Environmental Problems)*, SUMMER 1998, Volume 20, Number 2, p.129.
 - (14) *ibid.*, p.129.
 - (15) 田中美知太郎訳『ピレボス』, 田中美知太郎・藤沢令夫編集『プラトン全集 4』, 220~223頁。
 - (16) 前掲『ティマイオス』, 『プラトン全集 12』, 70~71頁。
 - (17) 『同上書』173~175頁。
 - (18) 前掲『法律』, 『プラトン全集 13』, 635頁。
 - (19) 『同上書』, 635~636頁。
 - (20) 『同上書』, 638~639頁。
 - (21) G. R. Carone, *op. cit.*, p.130.
 - (22) 前掲『法律』, 『プラトン全集 13』, 641~643頁。
 - (23) 前掲『法律』, 『プラトン全集 13』, 627~628頁。
 - (24) 前掲『法律』, 『プラトン全集 13』, 635~636頁。
 - (25) G.R.Carone, *op. cit.*, p.131.
 - (26) 『法律』はプラトン晩年の対話編である。

